「ソ連参戦　満州へ攻め込む」　メモ

●昭和20年8月15日、正午から「終戦」の玉音放送
▽6日に 広島へ原爆 9日には ソ連が
「日ソ中立条約」を破って 満州へ進攻
長崎にも 原爆が 投下された
▽国民は みんな「ああ、負けたんだ。
これで、戦争は終わったんだ」と 思ったが
実際は この日で 戦争は終わっていなかった
▽ソ連軍だけは その後も 攻撃を続けた
8月18日 占守島(千島列島最北端)に 砲撃と共に上陸
28日択捉島 9月1日に 国後島 色丹島へ
歯舞諸島占領を終えたのは 9月5日だった
▽9月2日には 東京湾の 戦艦ミズーリ号艦上で
降伏文書調印式 ソ連代表も 署名していた

ソ連の駆け込み参戦(8月9日)で

◆戦闘による死者
満州6万 樺太・千島5千 計6万5千人
◆停戦後の死者(厚生省資料)
満州18万5千 北朝鮮2万8千 樺太・千島1万
ソ連本土5万5千 計27万8千人

▽満州 北朝鮮の死者は ほとんどが 民間人
中でも 国境地帯に入植の 開拓団は
27万人の開拓民のうち 8万人近い死者
ソ連軍の猛攻の中を 逃げ惑い
飢えと 寒さの逃避行に 倒れていった

●ソ連本土の死者5万5千人は、シベリア長期抑留で
▽スターリンは 8月23日 極秘指令
「極東、シベリアでの労働に、肉体的に
耐えられる日本軍捕虜50万人を選抜せよ」
▽57万5千人が シベリアなど
ソ連全土1,200か所の 収容所に送られ
極寒の中での 苛酷な労働を 強いられた
▽最長11年にも及ぶ 最後の抑留者1,025人が
帰国したのは 昭和31年12月26日
経企庁が 経済白書で「もはや戦後ではない」
日本は 高度経済成長に向け 走り出していた
▽無事 ソ連から帰国したのは 47万2,900人

日本の歴史上初の玉音放送

正午の時報の後、和田信賢(アナウンサー)が「只今り重大なる放送があります。全国聴取者の皆様、ご起立願います」「君が代」が流れ、下村宏(内閣情報局総裁)が「天皇陛下におかせられましては、全国民に対し、かしこくも、おんみずから、大詔を宣(の)らせ給うことになりました。これより、謹みて玉音をお送りします」雑音まじりで聞き取りにくい放送だったが、昭和天皇の声が、静かな抑揚を伴って流れ出した。
「朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」

和田　信賢(わだ・しんけん)
大正1(1912)～昭和27(1952) 東京生まれ。昭和9年日本放送協会に入りアナウンサーに。スポーツ実況放送、「話の泉」の司会などで活躍。27年ヘルシンキ・オリンピック放送の帰途、パリで客死

下村　宏(しもむら・ひろし)
明治8(1875)～昭和32(1957) 和歌山県生まれ。台湾総督府総務長官で退官、大正11年朝日新聞に入り副社長。二・二六事件直後に広田内閣の閣僚候補に挙げられたが、陸軍の反対で流れ、日本放送協会会長など歴任。昭和20年4月鈴木内閣国務相・情報局総裁。「海南」のペンネームで、著に「終戦記」「終戦秘史」

スターリン(Iosif V. Stalin)
1879～1953 グルジア生まれ。大正11年共産党書記長として実権を握り大量粛正で個人独裁を樹立。昭和11年首相(人民委員会議長)に就任、対独抗戦を指導した。死後、その専制支配が批判された

▽抑留団体や ロシア研究者の間には
抑留中の死者は 6万2千～9万2千人との見方も

遺族には、まだ戦争は終わっていない

ソ連は平成2年4月、死亡者名簿や遺骨の引き渡し協定に調印した。5年10月来日したエリツィン(ロシア大統領)も、シベリア抑留を「全体主義の犯罪だ」と謝罪したが、シベリアの凍土に眠っている遺骨収集は、遅々として進んでいない。

●ソ連軍の満州進攻は、8月9日午前零時過ぎ始まった
▽満ソ国境の ほぼ全線にわたり 戦車を先頭に
ワシレフスキー元帥(極東戦線司令官)指揮の
80個師団 約174万人 大砲・迫撃砲3万門
戦車・自走砲5,250台 飛行機5,170機
▽迎え撃つ関東軍は 24個師団 約70万人
火砲千門 戦車 飛行機が それぞれ 200程度
▽満州の日本人は みんな「関東軍さえいれば…」
しかし 頼みの関東軍は「張り子の虎」だった

戦局の悪化と共に精鋭部隊の南方転出

昭和19年に11個師団が南方に引き抜かれ、20年に入ると、本土決戦用に4個師団と軍需資材の3分の1が内地へ、2個師団が南朝鮮に。

ソ連は4月5日、日ソ中立条約が満期となる21年4月以降は延長しないと通告、極東に続々と大軍を送って来ていた。5月、中国戦線から4個師団の満州転用を決めたが、とても足らず、関東軍は7月10日、満州の居留民で兵役年齢に該当する25万人の、「根こそぎ動員」を実施した。開拓団は男手をとられ、残ったのは老人と女、子供だけ。ソ連軍の攻撃、満州人の襲撃から守ってくれる者もなく、掠奪、暴行、集団自決に。

関東軍の方は「砲兵連隊」と称しながら、大砲が1門もない部隊。小銃も銃剣もない丸腰の兵隊が10万人も。満州の防備手薄が分かると、ソ連軍が出て来る。案山子でもいいから、師団と兵隊の数は多くしておきたい発想だった。

▽大本営が 5月28日 関東軍に提示した
「対ソ防衛作戦計画」は「静謐(せいひつ)保持」

「シベリアの祖父の遺骨戻る」

読売新聞(平成18年8月2日)に掲載された瀬川美智子さん(札幌市 37歳)の投書。

「シベリア抑留で亡くなった祖父の遺骨が、出征から62年ぶりに帰ってきました。祖父と幼いころに別れ、祖父の記憶がほとんどないという私の母は、『まるで生きて帰ってきてくれたようにうれしい』と、祖父の遺骨を抱きしめていました。

祖父が戻ってこれたのは、遺骨収集に携わっている多くの方々のお陰です。…DNA鑑定もして貰いました。

祖父と同じ部隊に所属し、生還した人の中には、『異国で無念の死を遂げた仲間をふるさとへ帰してやるのが自分の使命だ』と、活動している方もいると聞きました。…

祖母や母は60年以上、名前だけが刻まれた遺骨のないお墓に手を合わせ続けてきました。二人は今、泣いたり笑ったりしながら祖父の遺骨に話し掛けています。多くの方々の暖かい思いと努力に思いをはせながら、感謝の気持ちをかみ締めています」

満州のラジオ放送も朝から

今朝、ソ連軍は卑怯にも突如として満州国を攻撃して参りました。ソ連は日ソ中立条約を一方的に蹂躙し、不法にも全国境から侵入を開始しました。しかし、我に関東軍の精鋭百万あり。全軍の士気はきわめて旺盛、目下前線では激戦を展開、ソ連軍を撃退中であります。国民は、わが関東軍を信頼して、すべてを軍へ、前線へ。

スターリンの狙いは…

関東軍弱体化を、米軍やソ連の東京大使館の情報で、十分に知っていた。それでいて大兵力を国境に集中した

▽万一 開戦になった場合 関東軍総司令部を
通化(朝鮮国境近く)に移し 満州の4分の3は放棄
満州南部と朝鮮を守り 本土決戦を有利に
▽虎頭 東寧(東部国境)の地下要塞は 抵抗したが
広大な西正面は 無防備のまま開放
ソ連軍は 無人の野を行くが如く 満州内部へ

●日本は、ソ連に和平の斡旋を依頼しようと…
▽「ポツダム宣言」が 発表(7月26日)されてからも
宣言に ソ連が入っていないことに 一縷の望み
▽東郷茂徳(外相)は 8月2日 佐藤尚武(ソ連大使)に
天皇の特使として 近衛文麿(元首相)派遣に
ソ連の理解を求めるよう 訓令した
▽広島原爆の 深刻な被害が入り 7日午後3時40分
緊急電報で モロトフ(ソ連外相)との会見を督促
「形勢益々逼迫シ『ソ』聯側ノ明白ナル態度速
カニ承知致度キニ付急速回答御取付相成様
此上トモ御尽力ヲ得度シ」
▽待ちに待った 佐藤の返電は 8日正午 外務省に
「モロトフが8日午後5時(モスクワ時間)会見する」
当初 8時と指定したのに 3時間早めて来た
▽スターリンは 広島への 原爆投下を聞いて
11日に予定の 対日参戦日を 2日繰り上げ
ソ連軍最高司令部も 7日午後4時30分
「9日攻撃開始」の 極秘命令を出した
▽8日午後5時(モスクワ時間)は 満州では午後11時
開戦1時間前に 形だけは 開戦通告を
▽佐藤が 定刻に訪ねると モロトフは
椅子に座らせ 読み上げたのが 宣戦布告文

ソ連の宣戦布告文

「…日本兵力ノ無条件降伏ニ関スル本年七月二六日付ノアメリカ合衆国、英国及ヒ支那三国ノ要求ハ日本ニヨリ拒否セラレタリ。コレカタメ極東戦争ニ関シ日本政府ヨリソ連邦ニナサレタル調停方ノ提案ハ総テノ根拠ヲ喪失スルモノナリ…ソ連邦政府ハ本年七月二六日ノ連合国宣言ニ参加セリ…右ノ次第ナルヲ以テソ連政府ハ明日即チ八月九日ヨリ日本ト戦争状態ニアルモノト思考スルコトヲ宣言ス」

のは、国境を一気に突破して、日本の降伏前に取れるものは取れるだけ取り、対日戦勝国としての発言力を、少しでも多く確保しておこうとした。

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)
明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年東条内閣外相。20年4月再び鈴木内閣外相となり、終戦に尽力した。東京裁判で禁固20年の判決を受け、拘禁中に病死

佐藤 尚武(さとう・なおたけ)
明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ベルギー、フランス大使を経て昭和12年林内閣外相。17年ソ連大使。戦後22年に参院議員。24年から4年間参院議長

近衛 文麿(このえ・ふみまろ)
明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。昭和12年第1次内閣を組織したが支那事変で「国民政府対手ニセス」と声明し早期解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で日独伊三国同盟を締結。16年第3次内閣で日米交渉打開に努めるも10月総辞職。戦後、戦犯に指名され服毒自殺

モロトフ(V. M. Molotov)
1890～1986 スターリンの側近。昭和5年人民委員会議議長(首相)。14年以来、外相。スターリン死後、32年に解任された

佐藤の電報は全て押さえられた

佐藤は東郷に再三「ソ連に斡旋を期待するのは誤り」と進言していたが、「万事休す」と思ったという。「開戦まで、まだ数時間あるが、それまでは外交特権があると思うので、この最後の会見の模様を本国へ打電したい」
モロトフは、即座に承諾したばかりか、「マリク大使が今同時に日本政府

●8日夜、東京では会見結果を固唾を呑んで待っていた
▽鈴木貫太郎(首相)は この日 広島への原爆で
天皇の「速やかに終戦を」の意思を 伝えられ
迫水久常(内閣書記官長)に 9日の
最高戦争指導会議 閣議開催を 指示していた
▽迫水が 9日午前2時頃までかかって 準備を整え
「今頃はもう、佐藤大使はモロトフに
会ったろうが、どんな回答が来るか」
3時頃 長谷川才次(同盟通信海外局長)から電話
「サンフランシスコ放送によると、どうやら
ソ連が日本に対して宣戦布告をしたらしい」
迫水は 驚いて「ほんとか、ほんとか」
「立っている大地が崩れるような気がした。
全身の血が逆流するような憤怒を覚えた」

●鈴木(首相)は、「聖断」による終戦の決意を固めていた
▽迫水に「いよいよ来るものが来ましたね」
車を飛ばして来た 東郷(外相)にも
「この内閣で始末をつけることにしましょう」
「何はともあれ、陛下の思召しを伺う」と参内
首相官邸に戻ると 出迎えた迫水らに
ただ一言「戦争はやめるよ」
そして 迫水を呼び止め
「いざという時には、陛下にご決定して頂く」

終戦までの経緯

9日午前11時から最高戦争指導会議、午後2時半からは閣議が開かれた。東郷(外相)は「ポツダム宣言中に挙げられたる条件中には、天皇の国法上の地位を変更する要求を包含し居らざることの了解の下に、政府は宣言を受諾す」との意見で、米内光政(海相)も賛成した。

これに対して阿南惟幾(陸相)は、皇室の地位の絶対保持、武装解除は内地に帰って実施、戦争犯罪人は国内で処理、保証占領の留保ーこの4条件をつけて反対し、梅津美治郎(参謀総長)、豊田副武(軍令部総長)も同調、深夜まで紛糾した。

午後4時頃、長崎への原爆投下が報告され、鈴木は御前会議開催を決意する。平沼騏一郎(枢密院議長)も出席、外相意見に賛成したから、鈴木が宣言受諾に賛成すれば4対3で決まったはずだに宣戦布告を伝達している」

佐藤は大使館に戻り、すぐ打電したが、ソ連は奇襲が成功するよう、電報を押さえてしまった。翌年5月に帰国するまで、毎月1本の電報は許すと言うので、大使館員、在留邦人の健康状態、生活ぶりを知らせ、家族にも安心させた積もりだったが、1本も着いていなかった。佐藤は「宣戦布告の電報だけは東京に取り次がれると信じていたが、それさえ着いていなかった。ひどい話だ」と憤慨している。

マリクが東郷に面会を求めたのは、ソ連軍が満州に殺到していた9日昼。東郷の方はソ連参戦の新事態で会議の連続。「急用なら次官に面会するよう」伝えたところ、「10日でよろしい」ということで、ソ連政府の正式な宣戦通告は10日になってからだった。

鈴木　貫太郎(すずき・かんたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948) 父親が代官をしていた関宿藩の飛び地、大阪・久世で生まれる。海軍大将。大正13年連合艦隊長官、14年軍令部長。昭和4年1月侍従長。二・二六事件で襲撃され瀕死の重傷を負って辞職。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し、「聖断」で終戦に導く

迫水　久常(さこみず・ひさつね)
明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島県生まれ。大蔵省に入り、銀行保険局長の昭和20年4月鈴木内閣書記官長に就任、終戦に尽力した。27年自由党衆院議員。池田内閣で経企庁長官、郵政相。31年参院議員。著に「機関銃下の首相官邸」

長谷川　才次(はせがわ・さいじ)
明治36(1903)～昭和53(1978)青森県生まれ。同盟通信に入り報道局長、海外局長。戦後時事通信社を創立、代表取締役

った。鈴木はその方法を採らずに10日午前2時過ぎ聖断を仰いだ。天皇は「私は外務大臣の案に同意する」と答えられ、最初の聖断が下ったが、米国側回答を巡り国体護持が守れるか、激動の日々が続き、14日正午再度の聖断に。

●ソ連参戦に、一番大きな衝撃を受けたのは陸軍

▽「ポツダム宣言」発表後も 陸軍省軍務局は
「総理ハ阿南、軍需・食糧・内務ハ陸軍関係者」
新内閣案を用意し 鈴木内閣が
和平の動きを見せれば 倒閣して 陸軍内閣を

▽参謀本部作戦課も 広島への原爆投下後も
「本土決戦、必勝の信念にいささかの変化なし」
しかし 本土決戦計画「決号作戦」は
ソ連中立を前提として 初めて 成り立つもの
河辺虎四郎中将(参謀次長)は 日誌に
「蘇ハ遂ニ起チタリ！ 予ノ予想ハ外レタリ」

終戦工作がソ連一本槍になったのも…

河辺が4月22日、東郷(外相)に「対ソ工作を大胆にやってほしい」と要望したのが始まり。参謀本部は、ソ連の中立条約不延長、極東に兵力集中の状況に、「絶対に日ソ戦の発生を回避するため、あらゆる方途を講ずる」の基本方針を決定、東郷の対ソ交渉に陸軍の支持を確約した。

東郷がこれに乗ったのは、陸軍も同意しているソ連斡旋による和平工作で、まず「終戦への足場」を作りたいと、思ったからだった。

参謀本部も緊迫した状況は掴んでいた

白木末成大佐(ロシア課長)は7月26日、満ソ国境を視察して、こう報告している。「ソ連軍は150万の兵力、飛行機5,400機、戦車3,400台の極東輸送を完了、牡丹江の綏芬河(すいふんが)国境までソ連兵が進出し、戦車がうろついている。ソ連軍は冬営準備をしていないから、対日参戦は8月10頃であろう」と断言していた。

▽ソ連参戦が 時間の問題と 分かっていながら
なぜ 最後まで ソ連に頼ろうとしたのか？

米内 光政(よなない・みつまさ)
明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和11年連合艦隊長官となり、12年林内閣海相。第1次近衛、平沼内閣に留任。15年首相に就任したが、日独伊三国同盟に反対したため陸相辞職で内閣総辞職。19年7月現役に復帰し小磯、鈴木内閣海相となり終戦に尽力

阿南 惟幾(あなみ・これちか)
明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。昭和4年から4年間侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監。20年鈴木内閣陸相。敗戦の夜自決

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)
明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官。19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑を受け、拘禁中に病死

豊田 副武(とよだ・そえむ)
明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長などを経て昭和19年連合艦隊長官。20年5月軍令部総長。戦犯容疑で収監されたが23年釈放

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)
慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。司法次官、検事総長を経て大正10年大審院長。山本内閣法相、枢密院副議長を歴任。昭和11年二・二六事件後に枢密院議長。14年首相に就任したが、独ソ戦勃発で「複雑怪奇」の迷句を残して退陣。20年再び枢密院議長。A級戦犯で終身禁固刑。病気のため仮出所後に病死

河辺 虎四郎(かわべ・とらしろう)
明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中将。駐ソ・駐独武官、航空本部次長を経て昭和20年4月参謀次長

▽戦争指導班の見解は「ソ連は対独戦で甚大な犠牲を払ったから、対日戦では熟柿主義。日本の戦力弱体化まで待って、米軍の本土上陸が始まってから出て来る」陸軍の大勢が 支持したのは
本土決戦には ソ連に 中立でいてほしい
「名誉ある終戦」を考え 対ソ交渉に期待

▽関東軍も 9月以降と判断 陣地配備変更の最中
山田乙三大将(関東軍総司令官)も 8日 大連に出張中
全くの奇襲を受け 対応が 後手後手に

●日本政府は、ソ連に宣戦布告をしていない

大陸命(大本営陸軍部命令)第1347号(9日午後1時)

一、「ソ」連ハ対日宣戦布告ヲシ九日午前零時以降日「ソ」及満「ソ」国境方面諸所ニ於テ戦闘行動ヲ開始セルモ未タソノ規模大ナラス
二、大本営ハ国境方面所在ノ兵力ヲ以テ敵ノ進攻ヲ破摧シツツ速ニ全面的対「ソ」作戦ノ発動ヲ準備セントス

▽対ソ戦に 深入りせず 後の外交交渉に含み
関東軍を ハッスルさせたくない気持ちが
見え見えだが そんな力は なかった

▽陸相 参謀総長ら 陸軍首脳が決定した方針も
依然「対ソ交渉に期待」の 現実離れなもの

「ソ連参戦ニ伴フ陸軍ノ措置」

[方針] 帝国ハ「ソ」連ノ参戦ニ拘ラス依然戦争ヲ継続シテ大東亜戦争ノ完遂ニ邁進ス

[要領]
一 「ソ」連ニ対シテハ宣戦ヲ布告セサルモ自衛ノ為飽ク迄交戦ス
二 「ソ」連若ハ中立国ヲ利用シテ好機ニ乗シ戦争終結ニ努力ス 但シ皇室ヲ中心トスル国体ノ護持及国家ノ独立ヲ維持スルヲ最小限度トシ当分対「ソ」交渉ヲ継続ス
三 国民ヲシテ大和民族悠久ノ大義ニ生クル如ク重大決意ヲ促スモノトス(詔勅)
四 速カニ国内ニ戒厳ヲ施行ス

▽竹下正彦中佐(軍務課内政班長)が 起案したもので
「戒厳令」と 陸軍の 強烈な「徹底抗戦」の意思

山田 乙三(やまだ・おとぞう)

明治14(1881)～昭和40(1965)長野県生まれ。陸軍大将。参謀本部総務部長、第3軍司令官、中支那派遣軍司令官。昭和16年教育総監(兼防衛総司令官)となり、19年関東軍総司令官。シベリアに抑留、31年帰国

大本営の作戦会議では

9日午前8時開かれ、朝枝繁晴中佐(対ソ作戦主任参謀)は、「関東軍を強いと思わせるのが、従来の作戦だったが、ソ連が攻撃して来たからにはこちらの嘘が一遍にバレ、どのくらい持つか、後は時間の問題だ。どうせ負けるなら、後のことを考えるべきだ、となった。日ソ間には、中立条約があるのに、これを破ったソ連は後で外交交渉になった時に不利になる。国際世論で、ソ連を非難させた方が得策だ」そう考えて、宣戦布告はしないと決めた。

竹下 正彦(たけした・まさひこ)

明治41(1908)～平成1(1989) 熊本県生まれ。陸軍中佐。阿南(惟幾)の義弟で昭和19年軍務課内政班長。終戦直前、クーデターを計画し未遂(8.15事件)。戦後、陸上自衛隊に入り陸将、幹部学校長

大本営発表(8月9日午後5時)

一、八月九日零時頃より「ソ」聯軍の一部は東部及西部満「ソ」国境を越え攻撃を開始し又其の航空部隊の各少数機は同時頃より北満及朝鮮北部の一部に分散来襲せり
二、所在の日満両軍は自衛の為之を邀へ目下交戦中なり

国民の衝撃も大きかった

徳川夢声(漫談家)は日記に「ソ連参戦はたと止みたる 蝉時雨」の俳句。
斎藤茂吉(歌人)は憤りもあらわに「ソ

▽しかし 陸軍が初めて「国体護持」の下に
「戦争終結ニ努力ス」陸軍にとって
「ポツダム宣言」を 受諾するかどうかは
「国体護持」を出来るか どうかの問題に

●ソ連軍は、部隊ぐるみで掠奪、暴行をほしいままに
▽満州の居留民は 無法と無秩序の 大暴風に
▽「軍の家族だけが一等車や寝台車に乗り、植木鉢まで持って逃げ、居留民はほったらかしにされた」
こんな噂が 新京市内を 駆け巡った

避難輸送は「民・官・軍」の順だったが…

10日朝の避難輸送会議では、「輸送順序は民、官(満鉄を含む)、軍の家族の順とし、集合次第輸送する。民、官は至急触れを出し希望者を集めること。集合場所は新京駅前広場。第一列車は10日午後6時発とする」と決まっていた。

ところが11日朝、古海忠之(満州国総務庁次長)の所へ関東軍輸送担当参謀が来て、「実は関東軍の軍人家族は、すでに疎開させた。急に出発せよと言っても、組織のない所では間に合わない。軍の家族なら命令すれば一定時間内に出発出来るので、そうした措置をとった」そして「満州国官吏の家族を疎開させるから至急準備してもらいたい」古海も市民が騒いでいるのを知っていたし、「居留民の疎開が先決だ」そう思って「満州国官吏の特別扱いはお断わりする」と答え、やっと居留民の引き揚げが始まった。

新京駅に、順番を待って座り込む数千の人の波、雨の中を無蓋貨車にすし詰めの疎開列車。古海は「あの時の光景は、今でもまざまざと目に浮かぶ」と述懐していた。

●居留民155万の中でも、悲惨だった開拓団の27万人
▽関東軍が 防衛線として 線引した地点より北側に
最初から 置き去りにされたようなもの

なぜ、早く引き揚げさせなかったのか？

古海(満州国総務庁次長)は「どうもそうすることによって、軍の作戦計画が洩れるということが、最大の理由だったようだ」古海がハバロフスク

ビエツト露西亜の くにの行動は わが国民よ 永久に忘れじ」「けだものの のやからといへど かくのごと けがらはしきを 行ふべきや」

徳川 夢声(とくがわ・むせい)
明治27(1894)～昭和46(1971)福島県生まれ。映画弁士・漫談家。本名福原駿雄。昭和14年からラジオで「宮本武蔵」(剣豪物)を朗読、話芸は天下一品と評された。戦後も週刊朝日「問答有用」など文筆や放送で活躍した。著に「夢声戦争日記」

斎藤 茂吉(さいとう・もきち)
明治15(1882)～昭和28(1953)山形県生まれ。近代短歌を代表する歌人。青山脳病院院長。昭和26年文化勲章を受章

古海 忠之(ふるみ・ただゆき)
明治33(1900)～昭和58(1983)京都生まれ。昭和7年大蔵省から満州国に派遣され16年総務庁次長。敗戦でソ連に抑留、25年中国に引き渡され、18年の刑。38年釈放され帰国。東京卸売センター社長

責任を感じ自殺した草場中将

草場辰巳(関東軍大陸鉄道司令官)は、ソ連に抑留中の昭和21年9月、東京裁判の証人として、瀬島龍三中佐(関東軍参謀)と共に東京に護送されてきた。20日未明、宿舎で青酸カリ自殺をした。

手帳には「私の罪は大陸鉄道司令官だったにもかかわらず、満州の避難民に輸送を確保出来なかったことです。私は死ぬしかありません」と走り書きしてあった。

瀬島 龍三(せじま・りゅうぞう)
明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。昭和14年参謀本部参謀となり20年7月関東軍参謀。シベリアに

に抑留中、軍参謀長（東部国境）から聞いた話では、作戦会議で国境開拓団をどうするか問題になったという。ある参謀が「開拓団の引き揚げをやると、軍の後退作戦が洩れるから、見殺しにするのも致し方ない」と発言し、開拓民はそのまま国境地区に放置されたという。

▽6万6,980人が病死 自決・襲撃で1万1,520人
計7万8,500人 29%の大きな犠牲を出すことに
▽入植地の多くが 現地民を わずか5円の立退料で
追い立てるようにして 取り上げた土地
強制的な 労務・食糧供出も 反感を買っていた
敗戦と共に 鎌や棍棒を持った暴徒が…
開拓団は「根こそぎ動員」で 老人 女 子供だけ
多勢に無勢 集団自決する光景が 随所に

高社郷開拓団の集団自決

東安省の7開拓団は、逃避行の途中、ソ連軍戦車に包囲され、1,464人の犠牲者を出した。「平和のかけはし 長野県開拓団の記録と願い」（昭和43年信濃毎日新聞社編）は、こう書いている。

「それでは一足お先に…」子供を両手に、あるいは胸に、火葬場になる馬小屋へと立ち去る人がふえた。二発、三発…。消えかかる星空に、同胞が同胞を相撃つ銃声が鋭い。読経が低く流れるなかを、自決者はつづいた。髪を振り乱し、目を血ばしらせ、泣き叫ぶ子供を抱きしめて去って行く母親達。こんなことが、この地球上にあってよいことなのだろうか。「とうちゃん！ イヤダッ!!」流れだした血にすべりながら逃げまわる子供。何事かわめきながら、目をつぶってヒキガネを引く父親…。撃つものも、撃たれるものも涙を流しながら「惨劇」はつづいた。その数は五一四人 ― 。馬小屋は死体の山となり、高社郷の血は川となって流れた。

●軍隊は、国家を防衛し、国民の保護が最大の任務
▽日本陸軍も 昭和の初めまでは「国軍」
「皇軍」と言うようになったのは 昭和6年暮れ
荒木貞夫（皇道派将軍）が 陸相になってから

11年抑留され31年8月帰国。伊藤忠商事に招かれ、47年副社長、53年会長。「不毛地帯」（山崎豊子）のモデルとも言われた

満州移民は国策として

満州事変（昭和6年9月18日）に続いての満州国建国（7年3月1日）で、「五族（日本、満州、朝鮮、蒙古、漢民族）協和」「王道楽土建設」のスローガンの下に国策として送り出された人たちだった。まず7年10月3日、拓務省の第1次武装移民団423人が東京を出発、ソ連国境に近い永豊鎮（吉林省）に入植した。農村出身の在郷軍人。日本刀、小銃で武装し、匪賊と万一の対ソ戦に備えながら満州の広大な原野を切り開いて行こうというもの。

大量移民を促進したのが昭和11年、広田弘毅内閣時代に決まった「20ケ年100万戸送出計画」関東軍立案の「満州農業移民100万戸計画」を土台にしたもので、9月10日に第1期5か年計画として約13万戸、予算1億円を閣議決定した。12年9月には日満両国政府出資による「満州拓殖公社」が設立されて、内地には、開拓移民を送り出すための府県立訓練所が50か所に。

「中国残留孤児」問題の原点

やっと都市部に辿り着いても、避難列車はなく、厳しい冬に直面した。おぶった赤ん坊が死んで蛆がわいているのにも気付かない、半狂乱の母親。身ぐるみはがされて麻袋を体に巻き付けただけの女性。

新京の避難所では食糧が不足し、赤痢、チフスが大流行。墓地には氷点下30度の寒さで凍った死体が数百人分山積みにされ、野犬が食い荒し放題。

昭和21年春までの死者は、新京だけでも3万人。そんな中、「手元に置いて餓死させたり、病気で死なすよりは、

▽陸軍の参謀は「天皇の軍隊」の名のもとに
統帥権を振りかざし 国家も外交もない行動
何でも 軍事優先 作戦の都合優先
「国民の生命を守ること」が
軍隊最大の使命だということを 忘れさせた

●「終戦」の玉音放送後も、大本営命令が来ない
▽15日夜遅く 発令されたのは
「各軍ハ別ニ命令スル迄現在ノ任務ヲ
遂行スヘシ 但シ積極作戦ヲ中止スヘシ」
▽16日午後4時になって「即時戦闘行動停止」命令
「局地停戦交渉及び武器引渡容認」の指示
関東軍総司令部は 同夜 停戦命令を下達
▽しかし ワシレフスキー(ソ連軍総司令官)は
「天皇の声明は単なるステートメントに過ぎず、
日本軍の軍事行動を停止する命令ではない」
全軍に 攻撃継続を 命じた
▽20日早朝 真岡町(南樺太西海岸)に 艦砲射撃
市民に対する 無差別攻撃が始まった
部隊長は 停戦交渉に 村田徳兵中尉ら
13名を派遣したが 白旗を掲げているのに
自動小銃を乱射し 村田ら10人が戦死した
▽真岡郵便局では 女性電話交換手9人(17~24歳)が
職場を守って 青酸カリ自殺をした
泊尾(とまりお)郵便局長を 呼び出したのは
伊藤千枝(22歳)「ソ連兵が続々と来ています。私たちみんな、倒れてしまいました。私もだんだん目が見えなくなってきました。長い間、お世話になりました。さようなら」「死んではいけない。
ソ連兵が来たら、窓から白い旗を出すんだよ」
電話の声は 一段と弱々しくなり「弾がどんどん飛んで来ます。もう、どうにもなりません。
さようなら、さようなら」と 電話は切れた
▽昭和38年の終戦の日 稚内公園(北海道最北端)に
「殉職九人乙女の碑」が 建てられた
43年9月「北海道100年式典」で
ここを訪ねられた 昭和天皇は 双眼鏡で
樺太の方を 感慨深げに じっと見ておられた
▽真岡の死者は 千人を超え 樺太の停戦交渉は
22日に成立したが ソ連軍の攻撃は続いた

生きていてほしい」こう思うのは親心だろう。「せめて子供だけでも」と、中国人に預けた人も多かった。

秋山好古(陸軍大将)の言葉

日露戦争で「強大なロシアに勝てたのはなぜか」と聞かれ「ロシア陸軍が国民の軍隊でなかったからだ」ロシア皇帝の軍隊であって、「極東征服」という皇帝の野心のために動いた軍隊だ。日本の軍隊は、明治維新で生まれた四民平等の国家と国民を守るための軍隊であって、「だからこそ日露戦争という明治国家最大の危機に、みんな銃をとって戦ったのだ」

秋山　好古(あきやま・よしふる)

安政6(1859)～昭和5(1930)愛媛県生まれ。陸軍大将。日清戦争で騎兵団を率いて勇名を馳せ、乗馬学校長となり、騎兵科の基礎を作った。日露戦争で騎兵第1旅団長(騎兵隊)としてロシア・コサック騎兵を破る。近衛師団長、教育総監など歴任。予備役後は北予中学校長。日本海海戦の連合艦隊参謀真之は弟

荒木　貞夫(あらき・さだお)

明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。昭和6年犬養内閣陸相。陸軍急進派青年将校を中心とする皇道派の指導的存在として、統制派と対抗。11年予備役。13年近衛内閣文相となり、軍国主義教育を推進。戦後、東京裁判でA級戦犯として終身禁固刑。29年仮釈放

「殉職九人の乙女の碑」

碑文は、こう刻まれている。「昭和二十年八月九日、日本軍の厳命をうけた真岡郵便局に勤務する九人の乙女は、青酸カリを渡され最後の交換台勤務に向った。ソ連軍上陸と同時に、

▽この日 樺太の避難船3隻が 北海道留萌沖で
ソ連潜水艦に攻撃され 死者1,708人

満州国は13年の短い歴史を閉じた

満州国最後の重臣会議は17日深夜開かれ、皇帝溥儀は、退位と満州国解散を承認した。溥儀は日本へ亡命を希望したが、19日、奉天飛行場を離陸寸前、進駐して来たソ連軍に捕えられ、チタに連れ去られた。

●スターリンの対日戦決意は、いつだったのか？

▽太平洋戦争が始まり 世界中の主要国が
枢軸国 連合国に分かれて 戦っている中
日本は 対米戦遂行に ソ連中立を必要としたし
ソ連も 対独戦には 日本の中立が必要だった

▽中立は お互いの戦略的利益に かなう間は
守られるが 戦局のバランスが崩れ
必要がなくなれば いつでも 破棄される運命

▽独ソ戦が 勃発(昭和16年6月22日)した時
日本は どう 対応しようとしたのか

参謀本部は、対ソ戦の準備にかかった

対ソ戦に踏み切る目安を、極東ソ連軍がドイツ戦線に送られ、半減した時とした。冬のシベリアの制約を考えれば、開戦は9月初め。8月上旬には意思決定をする必要があるとして、7月7日、機密保持のため、「関東軍特種演習」(関特演)と名付けた第1次動員に踏み切った。

関東軍兵力33万を83万に、内地留守部隊も14万人増員するという大動員。ソ連はスパイ・ゾルゲの情報で日本軍の動きを的確に掴んでいた。極東ソ連軍は西へ移動せず、破竹の勢いを見せていたドイツ軍の進撃もモスクワ寸前でストップ、柿が熟したら拾う積もりの好機は、到来しなかった。しかも南部仏印進駐で、アメリカは8月1日、石油など対日全面禁輸。参謀本部は9日、年内の対ソ武力発動を断念した。

▽開戦後も 機会があればと うかがっていたが
ミッドウェー ガダルカナル敗戦が
戦局の 決定的なターニング・ポイントに

日本軍の命ずるままに青酸カリをのみ、最後の力をふりしぼってキイをたたき、「皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です」のことばを残し、夢多き若い命を断った。戦争は二度と繰り返すまじ。平和の祈りをこめて、ここに九人の霊を慰む」

溥儀(ふぎ)

1906～1967 姓は愛親覚羅、名は溥儀。清朝最後の第12代皇帝宣統帝で辛亥革命(明治44年)により退位。昭和7年、日本軍部の擁立により満州国執政に就任、9年皇帝(康德帝)に。日本敗戦によりソ連軍に捕えられ、ハバロフスク収容所に。中華人民共和国成立後、25年送還され、戦犯として撫順に抑留されたが、34年特赦

日ソ中立条約(昭和16年4月13日調印)

一、日ソ両国の相互不可侵
一、日ソいずれかが第三国と戦争になった場合、他方は中立を守る
一、有効期間は5年。期間満了1年前に廃棄通告をしなければ、さらに5年間自動延長する

ゾルゲ(Richard Sorge)

1895～1944 ドイツの共産主義者。大正7年ドイツ独立社会党(のち共産党)に入り14年ソ連共産党に入党。昭和5年上海で在中国諜報機関を組織し、8年にはドイツ新聞記者の肩書きで来日し横浜に対日諜報機関を創立した。近衛文麿ら、政界上層部と親しかった尾崎秀実(近衛内閣嘱託、元朝日新聞記者)から情報を入手しソ連に送った。16年10月検挙、19年尾崎と死刑に

開戦後の「当面ノ施策」

大本営政府連絡会議は昭和17年1月10日、「日蘇間ノ静謐ヲ保持スルト共ニ蘇聯ト米英トノ聯繋ノ強化ヲ阻止

▽日本の政策は 一貫して「静謐保持」に
熟した柿が 落ちるのを待つのは ソ連に

対日戦決意は、開戦直後から

ルーズベルト大統領は開戦翌日、リトヴィノフ(ソ連の駐米大使)に対日参戦を要請したが、モロトフは「ソ連は、対独戦に全力を集中しなければならず、また日ソ中立条約に拘束されている」こう回答するよう訓令しているが、これは、米国から軍需物資の増援などソ連参戦を高く売りつける意図からだった。

12月12日、蒋介石が対日共同戦線樹立を求めて来ると、スターリンは「ソヴィエトは日本と戦わねばならない。なぜなら、日本は必ず中立条約を破るであろうから」こんな書簡を送り「準備には時間が必要である」また18日、モスクワを訪問したイーデン(英国外相)にも、「ソ連は将来対日戦に参加するであろう。それには、日本に中立条約を破棄させるよう持って行くことが得策だ」と語っている。

▽スターリンは 昭和18年5月21日
日本海に至る鉄道建設を ドイツ軍捕虜の
強制労働で 短期間完成を 命じている
極東に 軍隊 物資を送る 具体的準備の始まり

米ソ協力の転換点が昭和18年10月

スターリンは18日、モスクワを訪れたハル(米国務長官)に、「ドイツを敗北させた後、対日戦争に参加する」と明確に約束した。米国の対ソ援助が急ピッチで始まり、飛行機輸送は毎月200機を超え、燃料類も月に50万トンに達した。

11月28日、テヘランでの米英ソ三国首脳会談では、米英が翌年19年5月までにフランス海岸に上陸、ドイツを西から攻めること、スターリンは「ドイツ降伏後の対日参戦」を約束した。

▽スターリンは 19年11月7日(ゾルゲ、尾崎秀実の死刑執行)
革命記念日の演説で 日本を「侵略国」と非難
▽ソ連の中立頼みの 日本の衝撃は 大きかった
11月16日の 最高戦争指導会議は
ソ連を刺激しないため 沈黙を守ることに

シ為シ得レハ之ヲ離間スルニ努ム」

ただこの時の静謐は、緒戦の連戦連勝に沸き立っている時。機会あれば、いつでも攻撃に転じるという意味だった。51個師団のうち、満州に13個師団残し、南方に向けたのは11個師団。

開戦10後の12月18日には、参謀本部は南方作戦が一段落したら南方兵力を20万に半減し、「昭和17年夏ヲ目途トシ関東軍ノ対ソ作戦準備ヲ極力促進スル」との方針を決めていた。

ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt)
1882～1945 米国第32代大統領。民主党選出。昭和8年大統領に就任、ニュー・ディール政策を推進し大恐慌に対処。第2次大戦で連合国を勝利に導き米国史上初の4選を果たしたが急死した

蒋介石(しょう・かいせき)
1887～1975 日本に留学し、士官学校に学ぶ。昭和3年国民革命軍総司令となり北伐に成功、南京政府、国民党の実権を握る。中共軍と抗日戦を指導したが、次第に反共路線を強め、24年国共内戦に。敗れて台湾に逃れ、中華民国総統

イーデン(Robert Anthony Eden)
1897～1977 英国保守党の政治家。昭和10年から外相を務め、30～32年首相

ハル(Cordell Hull)
1871～1955 昭和8年～19年の米国務長官。16年11月、中国からの日本軍撤退など「ハル・ノート」を提示、日本側は最後通牒と見なして、太平洋戦争に突入。20年国連創設の功労でノーベル平和賞

スターリンの「日本非難」演説

由来歴史の示すところによれば、侵略国は常に新しい戦争に対して被侵

▽席上 秦彦三郎(参謀次長)は
「ソ連は当然中立条約を廃棄すべく、ソ連としては今日、中立条約存続の理由を認めない。独裁国の指導者にとって条約と戦争とは別である。条約があるとて安心は出来ない」
極めて的確な 意見具申をしていたが
藁にもすがる思いが 戦争決意のソ連に
和平の仲介を 依頼する愚策に なっていく

ヤルタ会談(昭和20年2月4~10日)では
秘密協定が結ばれた。ソ連の出した大きな政治的要求ー南樺太返還、千島列島引渡し、旅順港租借、大連港の優先的利益ースターリンは、ルーズベルトにこれを認めさせる代わりに、対日参戦について、「ドイツ降伏2、3か月後」と期限を切って約束した。

▽スターリンの心配は 参戦前に 日本の降伏
そこへ 日本の方から 日ソ関係改善を
申し入れて来たのは 思う壺だった
▽広田弘毅(元首相)が マリク大使(駐日ソ連大使)を訪ね
日ソ交渉を申し入れたのが 昭和20年6月3日
マリクは モロトフの指示で のらりくらり
本国への報告も 電報ではなく 伝書使

●スターリンは、対日開戦を急いだ
▽ソ連共産党政治局は 6月26 27日
政府 軍参謀本部との 合同会議で
開戦日を 8月20日～25日の間と 決定した
▽スターリンは 7月16日夜 ポツダムに着くなり
ワシレフスキー(極東軍総司令官)に 電話を入れ
「満州進攻の日取りを10日間ほど早めよ」
攻撃開始日は 8月11日に 繰り上げられた
▽米ソの思惑を 一変させた 原爆実験成功(7月16日)
アメリカにとって ソ連の手助けは不要に
ドイツ降伏後の 東ヨーロッパでは
ソ連の 傍若無人な行動が 目立っていた
▽トルーマンは 24日(ポツダム宣言発表の2日前)
「8月3日頃を目標に原爆投下の準備」を命令
「ポツダム宣言」署名国から ソ連を外した
これが 日本に 無用な期待を 持たせることに

略国よりは準備を整えている。かの真珠湾事件や、その他の太平洋諸島に見る攻撃、香港、シンガポールに対する日本軍の最初の攻撃の如き、事実は決して偶然と見なすべきではない。侵略国としての日本が、平和愛好国としての米英よりも、戦争に対して完全なる準備を整えていたことを示すものである。

秦 彦三郎(はた・ひこさぶろう)
明治23(1890)～昭和34(1959)三重県生まれ。陸軍中将。大正15年から10年間にわたって、ソ連、ラトビアなど駐在武官を務め、陸軍切ってのソ連通。昭和18年参謀次長。20年4月に関東軍総参謀長。ソ連に抑留され31年シベリアから帰国

広田 弘毅(ひろた・こうき)
明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。昭和5年駐ソ大使。斎藤、岡田内閣外相を経て、11年二・二六事件直後に首相。日独防共協定に調印。12年近衛内閣外相。A級戦犯で文官中ただ一人死刑

米に意図的に「参戦はまだ先」
7月17日、ポツダム会談が始まる前、スターリンはトルーマンの宿舎を訪ね、対日参戦を表明した。トルーマンは日記に書いている。「彼(スターリン)は8月15日にジャップとの戦争に入るという。そうなれば、ジャップはおしまいだ」24日の米英ソ軍事会談でもアントノフ(ソ連軍参謀総長)は「8月中旬参戦」を言明、米統合参謀本部は、マッカーサー元帥に対し「8月15日ソ連参戦の見込み」と「それ以前に突然日本崩壊の可能性に備えて、日本占領政策を研究しておくよう」打電している。

▽スターリンには 大きな 誤算だった
「ポツダム宣言」に 加わることで
中立条約を破って 参戦する大義名分が
欲しかったのに その目算が 外れたばかりか
アメリカの 原爆保有も 知った
▽スターリンは 8月7日 広島への原爆投下(6日)で
開戦予定日を 2日繰り上げ
「9日午前零時(満州時間)の攻撃開始」を 命令した

●米ソは、日本降伏後をめぐり熾烈な駆け引き
▽スターリンは 米英 中国軍より 1日でも早く
満州 北朝鮮 樺太 千島 北支 蒙疆を占領
占領の既成事実を 作ろうとした
ドイツとの戦いで 荒廃した国土 再建のため
満州の産業施設の 徹底的な撤去と搬出
▽トルーマンは ポツダムで スターリンから
ヨーロッパの戦後処理に 妨害され
日本管理には ソ連を参加させず
マッカーサーを 連合国最高司令官にして
完全に 管理させることを 決めていた
▽モロトフ(外相)は 8月11日 ハリマン米大使を呼び
「連合国最高司令官を複数制にして貰いたい」
米ソ二人制にして 米国と同等の発言権を
確保しようとしたが ハリマンは
「最高司令官は一人、それもアメリカ人以外
には考えられない」と はねつけた
▽マッカーサーは 14日 連合国最高司令官に任命
15日 「一般命令第1号」を 日本側に伝達
トルーマンも スターリンに 内容を提示
どの地域の日本軍が どこの国の司令官に
降伏するかを 規定したもので
戦後の 極東の勢力範囲を決める 重要な意味
最大のポイントは ソ連軍司令官への
降伏地域に 千島が入っていないこと

千島は「日本本土」に

「ヤルタ密約」では、ソ連参戦と引き替えに千島列島が「ソ連に引き渡される」とされたが、千島の厳密な定義はなく、米ソ軍事会議で「千島列島は北端の4島を除き、米軍の軍事行動の範囲とする」ことで合意していた。これを根拠

トルーマン(Harry S. Truman)
1884～1972 米国第33代大統領。民主党出身。昭和20年4月ルーズベルトの急死で副大統領から昇格、戦後処理を担当

マッカーサー(Douglas MacArthur)
1880～1964 米国元帥。太平洋戦争開戦時の極東軍総司令官。日本降伏後、連合国軍最高司令官として日本占領に当たる。昭和26年朝鮮戦争処理問題で解任

まさに「火事場泥棒」だった

満州重工業が4億円を投資した鞍山製鉄所の設備は、完成わずか4か月でソ連に持ち去られた。どの工場も、設備を大急ぎで解体して、機械類、発電機、ボイラーなど根こそぎ接収した。
満州にあった日銀券や朝鮮銀行券、社債、株券からダイヤモンドや2,100キログラムの金塊など、今の時価で何10兆円に相当するものをかっさらった。
中立条約を破っての戦争に、他の連合国から「賠償を求める権利がない」と、横槍が入るのを見越して、その前にと計画的にやったのだ。

米国史上最短の大統領会見

トルーマンにとって、ソ連参戦がいかに苦々しいものだったのか ― 直後の記者会見は、「ソ連が日本に宣戦布告しました」と述べただけで、何のコメントもせずに「that's all以上」と、わずか2分で終わっている。

「一般命令第1号」

(イ)中国、台湾、および北緯16度線以北のインドシナでは、蒋介石中国総統に降伏
(ロ)満州、樺太、および北緯38度線以北の朝鮮半島では、ソ連軍司令官に降伏

に、「千島はマッカーサーに降伏する日本本土に含める」とされた。

朝鮮半島については、国務省と陸海軍合同委員会で協議した際、「出来るだけ北で日本軍の降伏を受け入れられるように」ということで、北緯38度線が京城を南に置いて大体朝鮮半島を二分することから、これを境界線とした。朝鮮が韓国、北朝鮮と南北に分断される運命は、この時に決まったと言える。

●スターリンは、すかさず反撃に出た

▽16日 ワシレフスキーに 北海道北半分 南千島の占領準備を 命令すると共に トルーマンに修正要求をした 「ソ連の占領地域に全ての千島列島の他、釧路と留萌を結ぶ線を境界として、北海道の北側を付け加えるべきだ」

▽トルーマンは 18日 スターリンへの返電で千島列島全体を ソ連軍降伏地域に 同意したが「北海道分割占領」の要求は 拒否した

「日本の全ての本土、即ち北海道、本州、四国、九州における日本軍は、マッカーサー将軍に降伏させることが私の意図であり、すでにそのための措置がとられている」

▽スターリンも 22日 トルーマンに電報を送り 「北海道分割占領」断念を 伝えた北海道上陸作戦に 用意した3個師団が28日からの 北方四島占領に 当たることに

▽対日戦の総仕上げが 日本軍将兵のシベリア移送国家防衛委員会(議長スターリン)は 8月23日「第9898号決定」で 捕虜50万人の ソ連移送命令

「第9898号決定」

一、極東、シベリアでの労働に肉体的に耐えられる日本軍捕虜約五十万人を選抜すること

二、捕虜を移送する前に、千人ずつの作業大隊を組織すること

▽実施要港は 13項目にのぼり はるか遠く ウラル山脈西までの 移送先その人数 職種が 一覧表になっていた

(ハ)東南アジアでは北緯16度線以南のインドシナから南にあり、ビルマからソロモン諸島の地域では、降伏すべき連合国の代表は、英国のマウントバッテン卿か、オーストラリア軍の司令官とする

(ニ)日本本土、フィリピン、それに北緯38度線以南の朝鮮半島では、マッカーサー元帥が降伏を受領する

(ホ)太平洋のその他の地域ではニミッツ米海軍元帥が降伏を受ける

「東京分割占領」も考えていた

スターリンは、「北海道占領」の要求について、トルーマンにこう説明している。「日本は大正時代のシベリア出兵(1918～1922年)で、極東地域を支配下に収めた。ソ連が日本本土の一部を占領しなければ、ソ連の国民世論は大きな屈辱を感じるであろう」

17日にはマッカーサー司令部(マニラ)に派遣しているソ連代表テレビヤンコ中将に、「北海道占領と共に東京にソ連占領地区を設定するようマッカーサーに要求せよ」と訓令している。

「北方四島」の歴史

スターリンは9月2日、勝利演説をした。対日参戦について「日露戦争敗北の汚名を濯ぐためだ」と。「日本は、ロシアの敗北につけこんで南樺太を奪い、千島列島に強固な橋頭堡を確保した」ーこう非難したが、日本の千島列島保有は、日露戦争とは関係ない。

徳川幕府は安政元年(1854)12月、下田でロシアと和親条約を結び、「択捉島を日本領土、それから北をロシア領」として千島列島の境界を決定し、樺太については国境を定めずに既成事実の尊重を確認している。

明治新政府になると「気候の不順な

●関東軍の指揮系統は、崩壊した

▽停戦申し入れにも なかなか 応じず

秦彦三郎(総参謀長)と ワシレフスキー会見は19日

21日 停戦協定が成立した

・将兵の帯刀帯剣を許すこと

・満州の要地では、ソ連軍進駐まで日本軍が警備を担任。進駐後は日本軍自ら武装解除する

・この間、通信機関、連絡用飛行機、自動車の使用は差し支えない

▽何一つ 守られなかった ソ連軍は 交渉中の19日

新京 奉天 ハルビン 吉林の 主要都市に

空挺部隊を送り 手当たり次第に 武装解除

交通 通信を 遮断していった

▽9月5日には 山田(総司令官)はじめ 関東軍首脳が

ハルビン経由で ハバロフスクに 送られた

●9月初め、貨車輸送によるシベリア移送が始まった

▽送られた先は 厳冬が迫っているシベリア

ウランバートル(外蒙) コーカサス ウクライナ

香月泰男(画家)は話している

奉天で貨車に乗せられた。貨車の扉は脱走しないように針金で外からガッチリ縛ってあった。小便も窓からするしかないし、狭くて横にもなれない。全く豚以下の生活だった。

▽収容所は 長さ20㍍ほどの 細長いバラックが

10数棟 そこに 4千人が 詰め込まれた

高さ3㍍の板塀と 有刺鉄線が張り巡らされ

四隅の望楼には 銃を構えた ソ連兵が立った

「シベリアダンス」

食事は、煙草の箱くらいのちっちゃな黒パンが一切れに、朝夕にスープ、昼には大豆の水煮がそれぞれ空缶に1杯。ソ連が「第9898号決定」で捕虜に支給するとしていた肉と魚150㌘、野菜600㌘の規定は、全く守られなかった。

すきっ腹を抱えたまま、鉱山採掘や材木の伐採、道路、鉄道建設など苛酷なノルマによる肉体労働を強いられた。冬は氷点下30度。吐く息はたちまち凍り、髭や眉も真っ白に。じっとしていると凍傷になるので、休憩中も鼻をもみ、

樺太よりは、北海道開拓に、その費用と労力を注ぐべきだ」との声が出て、明治8年、榎本武揚を特命全権公使としてロシアに派遣し、5月7日、「樺太・千島交換条約を締結した。

日本は樺太を放棄し、得撫(うるっぷ)島以北の千島列島全部を日本領としたが、日露戦争で獲得したのは、南樺太だけで、択捉、国後島など北方四島は最初から日本固有の領土だった。

榎本　武揚(えのもと・たけあき)

天保7(1836)～明治41(1908) 江戸生まれ。オランダに留学し、帰国後は幕府海軍奉行。明治維新で慶応4年艦隊を率いて江戸湾を脱走、函館・五稜郭で政府軍に抵抗した。明治2年征討軍に降伏、5年特赦。8年海軍中将兼特命全権公使としてロシアに赴き、樺太・千島交換条約を締結。逓信相、文相、外相、農商務相歴任

香月　泰男(かづき・やすお)

明治44(1911)～昭和49(1974)山口県生まれ。東京美術学校卒。昭和18年応召し満州・ハイラルに配属。22年までシベリア抑留。その辛い体験を、水墨画のような暗灰色と思い切って単純化した独特な表現で、「シベリア・シリーズ」57点を完成させ、44年第1回日本芸術大賞受賞

国際法規無視の非人道的行為

「ポツダム宣言」は、第9項で「日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルヘシ」ソ連が連合国一員である以上当然この条項に拘束されるし、「ハーグ条約」(明治40年)の「平和克服ノ後ハ、成ルベク速ニ俘虜ヲ本国ニ帰還セシムベシ」にも違反する行為だった。

足踏みを続けて、誰言うともなく「シベリアダンス」と、呼ぶようになった。
夜はシラミと南京虫の襲来で、体中がかゆくて、疲れた体を休めることも出来ない。栄養失調で見る見る痩せ細り、死者が続出した。凍って、硬直した死体が裸のまま、収容所の小屋に山積みにされていたという。

●関東軍は満州に軍人、居留民、開拓民を残そうとした

「ワシレフスキー元帥ニ対スル報告」

8月29日付「当然貴軍に於て御計画があることと存じまするが」と断った上で「満州に生業を有し家庭を有するもの並に希望者は満州に止って貴軍の経営に協力せしめ其他は逐次内地に帰還せしめられ度ひと存じます。右帰還迄の間に於きましては極力貴軍の経営に協力する如く御使ひ願ひ度いと思ひます」

▽「貴軍の経営」とは ソ連軍による満州経営だが
ひたすら 懇願する形の「満州残留希望」は
21日 関東軍参謀部の協議で 打ち出された
満州に蒔いた種を「民族再興」に生かすため
多くの軍人 居留民 開拓民を 残そうとした
▽シベリア送りなんて 予想していなかったにせよ
時代錯誤としか 言い様のない幻想
何でも 自分に都合のいいように 考え
スターリン体制に いかに 無知であったか

●満州から、最初に届いた惨状の報告が「高碕密書」
▽奥地から新京に 避難民が どんどん増え
食糧も乏しく 餓死が 心配されたし
越冬の準備も しなければならない
▽高碕達之助(満州重工業総裁 在満日本人救済会会長)は 9月22日
「日本政府に連絡をつけるのが先決だ」と
吉田茂(外相) 鮎川義介(満州重工業相談役)宛ての
密書を持たせて 2組の 決死隊を出した

「高碕密書」

全文2,081字。「掠奪連日連夜」の惨状を訴え、各地の罹災者は食べるもの、衣服なく、金さえ

スターリン独裁体制下で

昭和5年頃から反体制派を片っ端から捕まえて、国家建設の労働に使うラーゲリ(強制収容所)が、ソ連全土に広がっていった。独ソ戦が始まると、ドイツ人捕虜収容所建設が本格化し、350万人の捕虜が強制労働させられた。

関東軍参謀部会合記録(8月21日)

一 居留民及疎開民ノ処理 全般ノ趣旨ハ成ルヘク大陸ニオケル民族再興ノ素地ヲ残ス 他ハ内地ニ送還ス
二1. 武装解除後ノ軍人ノ処理 全般ノ趣旨ハ希望者ハ成ルヘク大陸ニ其他ハ内地ニ帰還セシム 2. 兵ハ現地ニ於イテ召集解除若クハ除隊セシメ在満ノ在郷軍人及在満徴集現役兵ハ努メテ満州ノ原職場ニ復帰セシム
三 開拓団ハ全員努メテ開拓団ニ帰還開拓ニ従事セシム

高碕 達之助(たかさき・たつのすけ)
明治18(1885)～昭和39(1964)大阪生まれ。昭和17年満州重工業総裁。敗戦と共に在満日本人救済会・会長となり、満州引き揚げに尽力。27年電源開発総裁。30年衆院議員に当選(当選4回)し30年鳩山内閣経企庁長官、33年第2次岸内閣通産相

吉田 茂(よしだ・しげる)
明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。駐伊・駐英大使。戦争中、和平工作を行い昭和20年4月憲兵に逮捕される。戦後、東久邇、幣原内閣外相を経て21年首相。5次の内閣を組織し対日講和条約を締結。引退後も元老的存在として政府、自民党に大きな影響力を持った。国葬

鮎川 義介(あゆかわ・よしすけ)
明治13(1880)～昭和42(1967)山口県生まれ。日産コンツェルンの創設者。昭和

なく、差し当たり金さえあれば、食べ物を買うことが出来るから、是非とも20億円、一人あたり千円の救済金を支給してほしい。また、老幼婦女子50万人を年内に引き揚げさせるため、必要な船を優先的に大連港に配船するよう、連合国側の承認を得てほしい。

この2点を、半紙四つ折りぐらいの紙に、毛筆で、米粒半分ほどの細い字で書いた。途中で見つかり没収されないよう、密書はマッチ棒2本ぐらいのコヨリにし、洋服の襟に縫い込んだ。

満州重工業の社員が2人ずつ2組に分かれ、朝鮮経由組は失敗したが、大連組（鮎川宛て密書を持参）はオンボロ船を調達して密航に成功、11月上旬、長崎に辿り着くことが出来た。

▽鮎川は すぐ 幣原喜重郎（首相）に届けたが
　敗戦国日本は 外国との交渉は 禁止され
　　対ソ交渉は もっぱら GHQ（連合国最高司令部）頼み

●南方の復員は順調なのに、関東軍将兵は、帰って来るどころか、消息さえ分からない

▽「どうも、シベリアに送られているらしい」と
　分かったのは 昭和21年3月末 AP通信の報道
　　5月に シベリア鉄道で帰国の 佐藤大使も
　沿線で 働かされている日本兵を 目撃し
　　ソ連抑留将兵の 引き揚げ要求が 高まった
　9月11日 留守家族3千人が ソ連大使館前で
　　「冬が来る前に夫や子供を帰せ」と デモ行進

▽11月27日 GHQとテレビヤンコ中将（対日理事会ソ連代表）
　との間に「引き揚げに関する暫定協定」

▽12月5日 樺太・真岡の第一陣1,927人が 函館へ
　7日には シベリアからの第一船
　　「大久丸」が 2,550人を乗せて 舞鶴へ

▽これも 1年余りで中断 シベリア引き揚げは
　米ソ冷戦の中 ソ連の外交カードになっていく

▽再開は 昭和24年6月27日
　舞鶴に着いた 日本兵の多くが 赤旗を振り
　　口々に「天皇島に敵前上陸だ！」
　代々木の共産党本部に 集団入党して
　　出迎えの家族を戸惑わせ 日本中を驚かせた

12年、日産を満州へ移転、満州重工業開発と改称。17年相談役となり帰国。戦後28年参院議員。中小企業政治連盟総裁

幣原　喜重郎（しではら・きじゅうろう）
明治5（1872）～昭和26（1951） 大阪生まれ。駐米大使、加藤、若槻、浜口内閣外相を歴任。昭和20年10月首相に就任した。22年衆院議員。24年衆院議長

米ソ冷戦の中、交渉は進まず

満州居留民の引き揚げは、昭和21年4月、ソ連軍の満州占領が終わって始まった。まず5月、米軍と国民政府軍、8月には共産軍との間に「在満日本人送還協定」が成立し21年中に約101万人が帰国出来た。その後、国共内戦が激化し、22年に3万人、23年5千人で引き揚げは一応終了とされた。しかし、残る50万人余りに不明な点も多い。

NHKの「復員だより」

戦争が終わった時、戦場や外地に肉親を送っている人たちがまず知りたいと思ったのが、安否だった。戦後の混乱で情報が乏しい中、昭和21年1月15日からNHKが放送を始めたのが「復員だより」だった。

兵隊たちの復員や引き揚げ予定、入港する港、船名などを流したが、各地の引揚援護局の壁は消息を求める貼り紙で埋まり、港では「誰々を知りませんか」と、上陸して来る人たちに聞き回る姿が見られた。

シベリアでは「民主運動」の嵐

軍隊の階級制度に反発した兵士が、民主化を求めて特権的地位にいた将校を、「反動分子」として攻撃した。朝から晩まで将校の吊し上げが横行、昼の休憩の時には車座になり自己批

▽シベリア引き揚げが 中止 再開を繰り返す中
ソ連政府は 昭和25年4月 約47万4千人が
帰国したところで「日本人捕虜の送還は、
わずかな戦犯容疑者を除き終了した」と発表
実際は 関東軍幹部や 特務機関員など
約2,500人が シベリアに 取り残されていた
▽朝鮮戦争が勃発(25年6月27日) 解決は遠退いたが
26年9月8日 サンフランシスコで
講和条約が調印され 日本は国際社会に復帰
しかし ソ連の調印拒否で なお 戦争状態が

●流れが変わったのは、スターリン死去(昭和28年3月5日)
▽11月の国連総会では「引き揚げ交渉決議」を採択
国連内に「捕虜特別委員会」も 設置された
12月1日には 戦犯811人が「興安丸」で舞鶴へ
▽昭和30年3月 鳩山一郎内閣が成立し 6月1日から
ロンドンで 日ソ国交正常化交渉が 始まった
ソ連は 色丹 歯舞諸島 返還のみを提案
重光葵(外相)は「国後、択捉を含む四島返還を」

ハバロフスク事件

収容所では締め付けが強化され老齢、病弱者まで極寒の屋外作業に駆り出すようになっていた。ハバロフスク21分所で30年12月19日朝、769人が氷の上に座り込んで作業を拒否、31年3月2日からはハンガー・ストに。ソ連は11日早朝2千の兵力を投入してストを停止させ、収容所長ら処罰、作業報酬、医療改善を約束した。

▽老齢 病弱者の帰国が始まり 瀬島さんの帰国は
昭和31年8月19日「『祖国』という二文字が、
この時ほど胸に深く刻まれたことはなかった」
▽10月19日「日ソ国交回復に関する共同宣言」調印
「平和条約は継続交渉とし、
平和条約発効時に歯舞、色丹を返還する」
▽日本の 国連加盟の障害は 取り除かれ
国連総会は 12月18日
全会一致で 日本の加盟を 可決した
▽26日には ソ連から 最後の集団帰国者
1,025人が「興安丸」で 帰って来た

判を強制する。夜は共産主義の勉強会。先頭に立つアクチブ(活動分子)には、若い将校も入るようになった。
「反動」呼ばわりされた瀬島さんは、参謀本部参謀時代に反ソ活動をしたとして軍事法廷で重労働25年の判決を受けていたが、「ソ連人から言われるのならまだしも、同胞であり、将校だった連中から言われるのは何とも情けない限りだった」
「中佐殿、みんな赤大根ですから、我慢して下さい」同情してくれる兵隊もいたが「中は真っ白だが、表面だけが赤い大根」という意味で、そうしなければ自分の命が保たないと、1日も早く帰国するための方便だった。

「シベリア天皇」

兵士による民主委員会が組織され、リーダーは捕虜向けの「日本新聞」を編集していた浅原正基。東大在学中、反軍国主義運動で懲役2年(執行猶予5年)の判決を受け、昭和18年召集され、関東軍ロシア語教育隊員をしていた。
週3回、15万部発行の紙面は「社会主義国躍進」を伝える記事で埋まり、抑留者が一番知りたい日本のニュースは、貧困、労働争議などの社会不安や戦犯追及の動き、といったもの。民主委員が食糧割り当ても決めるようになり、言うことを聞かないと、「反動」扱いをされるので、頂点に立つ浅原は「シベリア天皇」と呼ばれた。

重光 葵(しげみつ・まもる)
明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。駐ソ・駐英大使を経て昭和18年東条内閣外相。小磯内閣に留任。A級戦犯で禁固7年。27年衆院議員。改進党総裁。29年鳩山内閣副総理・外相に就任、31年日ソ国交回復と国連加盟を実現した

「ソ連参戦 満州へ攻め込む」関係年表

明治 8	1875	5. 7	ロシアと千島・樺太交換条約調印
37	1904	2. 10	ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる
38	1905	9. 5	日露講和条約調印。南樺太、日本領に
大正 7	1918	8. 12	日本、シベリアに出兵（大正11年10月撤兵）
8	1919	4. 12	関東軍司令部設置（当初は旅順、のち新京に移転）
昭和 6	1931	9. 18	柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる
7	1932	3. 1	満州国建国宣言
		10. 3	満州へ武装移民団423人、東京出発
11	1936	9. 10	「満州農業移民第1期5か年計画」決定
12	1937	7. 7	盧溝橋事件勃発。支那事変始まる
14	1939	5. 1	満蒙国境ノモンハンで日ソ両軍衝突
		9. 1	第2次世界大戦始まる
15	1940	9. 27	日独伊三国同盟、ベルリンで調印
16	1941	4. 13	日ソ中立条約調印（有効期間21年4月）
		6. 22	ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる
		7. 7	参謀本部、「関特演」の第1次動員
		7. 28	日本軍、南部仏印進駐開始
		8. 1	米、対日石油の全面禁輸
		8. 9	参謀本部、年内の対ソ武力発動断念
		10. 18	東条英機内閣発足♦ゾルゲ逮捕
		12. 8	太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃
17	1942	6. 5	ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失
		8. 7	米軍、ガダルカナルに上陸開始
18	1943	10. 19	スターリン、訪ソのハル米国務長官に初めて対日参戦を表明
		11. 28	テヘラン会談。スターリン、参戦約束
19	1944	7. 18	東条内閣総辞職（22日 小磯国昭内閣）
		10. 20	米軍、レイテ島に上陸
		11. 7	スターリン、日本を「侵略国」と非難♦国際スパイ・ゾルゲ、尾崎秀実死刑
20	1945	2. 4	米英ソ三国首脳、ヤルタで会談
		2. 10	スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏2、3か月後に対日参戦」を約束
		4. 5	小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命♦ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
		4. 7	鈴木内閣成立（外相には東郷茂徳）
		4. 22	参謀本部、東郷に対ソ工作申し入れ
		5. 7	ドイツ、連合軍に無条件降伏
		5. 14	最高戦争指導会議の6首脳、「和平にソ連仲介」の方針決定
		6. 3	広田弘毅元首相、ソ連大使マリクを訪ね、日ソ関係改善交渉始める
		6. 26	ソ連政治局、政府、軍合同会議で対日開戦日を8月20日～25日の間と決定
		6. 29	トルーマン、九州作戦（11月1日）承認
		7. 10	関東軍、25万人の根こそぎ動員実施
		7. 16	米が原爆実験成功♦スターリン、ポツダムに着くと満州進攻を8月11日に
		7. 17	米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く
		7. 24	ソ連、米英ソ軍事会議で8月中旬の対日参戦表明♦米統合参謀本部、マッカーサーに「ソ連8月15日参戦」と打電♦トルーマン、「日本に8月3日頃を目標に原爆投下」の準備命令。ポツダム宣言署名国からソ連を外す
		7. 26	ポツダム宣言発表（米英中首脳連名）♦参謀本部ロシア課長「極東ソ連兵力150万、参戦は8月10日頃」と視察報告
		7. 28	鈴木首相、記者会見で「ポ宣言黙殺」
		8. 6	広島に原爆投下
昭和20	1945	8. 7	ソ連、対日開戦を2日繰り上げ9日に
		8. 8	モロトフ外相、佐藤大使に「対日宣戦布告」を通告（モスクワ時間午後5時）
		8. 9	ソ連軍、満州で侵攻開始♦長崎に原爆♦最高戦争指導会議、臨時閣議（10日午前2時過ぎ）「終戦」の最初の聖断下る♦大本営（午後5時）「日満両軍交戦中」と発表
		8. 10	新京から軍人家族を乗せ避難列車
		8. 11	モロトフ、ハリマン米大使に「連合国最高司令官を米ソ2人制に」と要請
		8. 14	正午、「終戦」の再度の聖断下る♦連合国最高司令官にマッカーサー元帥
		8. 15	正午、終戦の玉音放送♦マッカーサー「一般命令第1号」を日本側に伝達♦ソ連軍への降伏地域から千島を外す
		8. 16	大本営、「即時戦闘行動停止」命令「局地停戦交渉及び武器引渡容認」指示♦スターリン、「全千島と北海道北半分占領」を要求、極東軍に作戦準備命令
		8. 17	満州国解散、皇帝溥儀退位
		8. 18	トルーマン返電。千島に同意したが、「北海道分割占領」は拒否♦ソ連軍、千島列島最北端の占守島に上陸
		8. 19	秦彦三郎関東軍総参謀長が極東軍総司令官と停戦交渉♦ソ連軍は新京、奉天などに空挺部隊を送り日本軍の武装解除♦溥儀、奉天でソ連軍に連行
		8. 20	ソ連軍、樺太西岸の真岡を攻撃。郵便局女性交換手9人が青酸カリ自殺
		8. 22	樺太の停戦交渉成立♦樺太の避難船3隻、ソ連潜水艦の攻撃で死者1,708人
		8. 23	スターリン、「日本軍捕虜50万人を選抜しシベリアへ移送せよ」と命令
		8. 28	ソ連軍、択捉島に上陸
		9. 1	ソ連軍、国後島、色丹島に進出
		9. 2	戦艦ミズーリ艦上で降伏文書調印式
		9. 5	ソ連軍、歯舞諸島を占領♦山田乙三関東軍総司令官、ハバロフスクへ移送
		9. 22	高碕達之助（満州重工業総裁）、決死隊に満州の惨状を訴える密書を持たせ日本へ
21	1946	1. 15	NHKが「復員だより」のラジオ放送
		4. —	ソ連軍の満州占領終わり在満日本人引き揚げ始まる。年内に101万人帰国
		9. 11	抑留者家族がソ連大使館前でデモ
		11. 27	GHQ、ソ連と「引き揚げ暫定協定」
		12. 5	真岡から帰国第1陣1,927人が函館へ
		12. 7	シベリアの第1船、2,550人が舞鶴へ
24	1949	6. 27	中断していたシベリア引き揚げ再開
25	1950	6. 27	朝鮮戦争勃発
26	1951	9. 8	サンフランシスコで吉田茂首相が出席し、対日講和条約調印
28	1953	3. 5	スターリン死去
		12. 1	在ソ戦犯811人、「興安丸」で舞鶴へ
30	1955	6. 1	ロンドンで日ソ国交正常化交渉
		12. 19	ハバロフスクで抑留者がスト闘争
31	1956	10. 19	「日ソ国交回復に関する共同宣言」に調印。平和条約は継続交渉とし、平和条約発効時に歯舞、色丹を返還
		12. 18	国連総会、日本の国連加盟を可決
		12. 26	ソ連抑留最後の1,025人、舞鶴に帰国